

民基子郡散三集 十

了

庫	文	閣	內
三	一	八	和
七	八	八	書
函	九	九	類
一	九	號	
七	冊		
架			



內閣文庫	
番號	和 18889
冊數	99 (30)
函號	217 35



民基、郡散三集之十



東京

淺草文庫

月基ノ撰書三冊ノ十



○町奉行松平氏書状字

追書之ニ二日候後下小倉場為見也
下ノ力如門也水ノ一向内不カケヤ
歩向ノ動カ合候ニ市代未定ニ仕合
御城入ノ日見分有六ノ日之動カ
近赤坂一ニ日候ニ一向内ノ余様
御書ノ力如也
一様ノ書ノ日候御書ノ日候御書ノ日候
候也云々候也云々動カ也又云二日書状字

後大い毎大地震の時其日僅先二回怪歌来
て大い公に
〜〜人易くたな

○七つ時と申す比度二つ川續世富る方とて
春より不波唯一度三実倒〜依り鴨居指杯
〜つと壁と爲り〜柳有〜打〜不波振落
換〜危と申す如く位と〜丸尻と改訂書
味と申すは誠今夜初右神仕合

○日候不三実依り由書前〜鳴〜〇〇〇〇回と結
法書亦と〜石天井高壁と倒と法と不
〜〜〜〜

○白剛の障子振脱と七十寸程の〜法し不
中斗〜

○同候より白剛の震つ〜一室〇〜何居天井
落し外由以候〜と書す不波大波〜

〜〜〜宛着法三日〜と止〜不〜此の事
益事二百度余も震是一昨夜杯泊者言
六時頃か玉附〜〜如四十九度中〜
ま〜人〜方言〜日流〜

○今日〜

此處之人又言雷鳴有時出云云大風而雨

○島原山嶽城（山崎）の地震は云々
 此處の地をゆきし時角倉常一は降脚並
 比震しあり吾れ亦右に越ゆ。右に存する
 之者亦右に山々焼死し其の吹かす一毎に心痛
 云々

○二條沖城（三方）は日土居徳通坐落東且
 日土居一十人持位大石信長が台町キヤコ
 日土居為馬も日土居根茂も日土居大乃南

三十間半沖城に倒さる小川辰一も云
 日土居六拾五例日土居二十万半日土居く
 右準一沖城の時亦日土居損ふに後大遠
 日土居後取日土居月信も云々

○市中松原家夥多死人怪妖人々有之云々
 市中一々怪妖人々有之云々
 人々一々會死復活の町家も有之云々
 一因其毒を介して清は仕合も同様に云々
 ○此れは日土居比木大造も日土居損するに
 仙洞日土居の口は云々

禁裏 為田殿余後(口預) (口由) 口修後中

之(口由) 口誠(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

七月八日

下(口由)

た令台反

高(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

者信(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

之(口由)

○昨今日(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

○京初町(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

書(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由) 口(口由)

一其地免角不似幸一由之信下也。但外以凌
云為主。極平。乃下之後。四地也。〜のり〜
返り。此知佳。通方。〜の〜其某かの。諸種
白く。おれ。凌。長。用。物。中。部。の。海。果。の。諸。種。
凌。急。一。一。群。南。方。の。雷。鳴。海。の。由。諸。〜。
此。古。南。年。只。と。一。白。雷。云。〜。
〜の。在。の。物。の。交。一。此。二。の。中。中。年。以。儂。〜。大。地。農
〜。引。續。二。交。〜。農。の。後。〜。引。と。流。〜。上。下。は
不。沙。庭。等。外。〜。大。か。〜。右。凌。〜。の。奥。の。且。好。〜。特
在。及。入。倒。二。井。不。沙。庭。等。〜。〜。外。亦。〜。望。海。

白。倒。不。沙。中。倒。〜。の。乃。純。上。下。〜。〜。人。の
怪。我。の。字。在。る。乃。計。信。の。思。あ。〜。〜。下。の。石。地。農
後。折。〜。益。長。〜。も。か。〜。宛。農。〜。成。〜。か。〜。〜。農
初。〜。〜。〜。在。る。一。此。の。〜。〜。日。迷。〜。〜。味
〜。在。の。信。の。葉。云。〜。〜。〜。一。此。夜。時。夜。完。〜。外
不。〜。長。庭。等。の。廣。場。の。竹。〜。の。圍。住。建。を。相。此。〜。〜
の。家。種。〜。〜。一。汎。舟。宿。住。の。儀。の。在。の。七。十。丈。〜
人。も。計。度。〜。極。成。極。成。不。平。由。〜。在。の。二。条。河
城。西。つ。并。石。垣。中。〜。〜。〜。城。口。余。程。換。〜。八。九
人。も。怪。家。人。の。在。の。由。を。外。市。中。倒。家。等。換。〜。

救多怪人死亡者此の拾遺三人并祈か
あつて死するに死に計たるも幸使はれ
計帳中二の定て大違成評判一任と
實りの不れ敢て二の定て大違成
才いた程も云ひ死に計たるも幸使はれ
活の死に由之趣の死に計たるも幸使はれ
おんよの石と信中二の定て大違成

七月四日

大右連

要右連様

○大坂目付付本下大書本書子

南日二日申刻に京都大地震定て過つ
取知らぬなり同如由緒柄三条殿新書
本書も定ておんよの石と信中二の定て大違成
右定入信後を二条

御城口外河川外大破ありし御殿向
西へ傾き御櫓外垣石垣未だ傾く処あり
御城口大書院元日小庭和口書院小庭より
小庭へ流倒れ多く外堀也地西裂割換
物ありしに死に計たるも幸使はれ
大書院元日小庭和口書院小庭より

七月廿一日
由東へ西へは道に
十六日若狭中へ
編成の被換に
先年より家来を
十日の御成に
山由に於て
○由東へ西へは道に
池西の町家も
中津大塚屋
池山由中田
之如中へ
之後の
○在り定
私儀違
形一
也
本下
利光

七月廿一日

間宮庄六郎様

○二条殿家来書状の写

計度京都大妻次郎書状の写

申之并地震宜初一ツク御之云々如門續大
地震形より川向より川系河系所口过るか合
久合より口方七煙之家形清高の言夥多
之曰七煙山と隱し一歳七歳より三年云々
多妻の事云々云々為警入の事右月向不毎
出松途中より門道一三条殿は左附右匠
町家者有皆所云々中云々云々及戸と及
是人も家口不中乃中云々右怪家入粒
有云々右家形倒りの形云々六沖口は
築比高右形一三条殿は如云々地倒七歳

六ノ下雨殿の左殿之人は江一流の庭住居を
云々及門道震色一昨日の六つ口在及
お成の時別々震か一昨日の夜は清庭
住居日朝卯刻夕三時治お成り
而云々震入の時而上一日震色一昨日
夜も口庭震色一昨日の夜も口庭震色
上天子小沖不沖庭お沖
仙洞沖不の度清不の清庭お沖
右宮沖不の清庭出沖お入治事可成
より左路の三日の夜も形中謝史

首より吹奏の調... 九時... 比... 付... 穀... 校... 人... 大... 師... 穢... 夕... 大...

乃... 之... 徳... 毎... 乃... 二... 不... 中...

一物並未雨は仕合に在るに先格の候も
云々の仕合に在るに先格の候も
口は利向は上京に在る候中上は口
より二枚も徹仕仕付候外腹方仕立札
等日付候に在る候也

七月六日辰九時討也

東条守也

○大地震候に先口雨書

石原清左衛門

尚月二日申中刻大地震に移り東海道大津宿
并内所... 津家六軒お來所... 家並悉く及換所
石化震後翌二日午刻迄追救及此の家指搦初

市中に在るに先格の候も
震初之日在治仕奉るに先格の候も
亦之口在右に私口及不并... 代長屋向津宿
換所仕立仕付津家別条... 在り候に代長
和橋の多し別村... 候に先格の候も
一... 候に先格の候も

庚子月

石原清左衛門

口是所

○昔月二日申刻大地震に先格の候も
小橋之税

通月二日夕七時頃に京都大比叡^三園^三三^三九^三園^三
 者^三新^三之^三後^三少^三々^三地震^三地^三震^三未^三止^三日^三言^三
 以^三て^三大^三神^三お^三治^三り^三中^三の^三京^三都^三一^三帯^三に^三後^三日^三市^三中^三に^三
 怪^三家^三人^三ホ^三シ^三多^三く^三少^三騒^三同^三事^三中^三に^三在^三る^三在^三村^三に^三
 其^三同^三夜^三之^三騒^三付^三支^三配^三可^三々^三に^三見^三分^三代^三
 其^三之^三方^三に^三調^三直^三と^三い^三ふ^三も^三稀^三々^三大^三地^三
 震^三付^三不^三致^三敷^三け^三候^三中^三に^三上^三り^三候^三上^三

高
七月

小堀之税

且勘定所

○大青蓮堂來書

一 此二日七時頃通高為少一方が明動仕地震法
 尚津城中介梅田堀小馬があり方口太鞍樽
 近し方の三三信同被却甚正梅とゆり為一為三
 石垣之補か一馬もひづり方為人三付来に
 亦通所し不若成之外 津城中口梅田米藏未
 破壊あり青次口小屋とあり口青次口小屋とあり口
 小屋とあり破損多喰道門口同夜換口小屋探り潰
 一 大目通の方を高田拾新恒々としてい住居等
 新水由在の方を換り少入の形ありてい住居
 新水成口小屋と音在の 津殿向口巻口樽

向き格別の大破を云々在由あり一死に換ふるに
る日在右二日夜あり高元元月付に破九時
頃と云ふ報あり是れ小倉中よりありと云ふ同夜
横方破換よりあり法名ありと云ふ
持来火元元附程に書流ありと云ふ
いれ右地震の節 御城中に西に揺りし
に東に書流ありと云ふ六人怪我あり先命を別
命より外に怪我なし取柄不仕り各地震後
續あり方あり心動ありと云ふ
大震も二日ありは二日夜に同日

横初一統あり近も小倉外廣に赤寄集り
二日夜に右破日在の報あり此の次者日小倉
ありと云ふもの多しと云ふ
初ありと云ふと云ふ一際活ありと云ふ
陽師より奏ありと云ふ 禁裏にも言中殿に梅
の庭にて行幸ありと云ふ
安き心あり怪種ありと云ふ
云日在報ありと云ふ右地震取沙法に府表あり
云々ありと云ふ
日在もありと云ふ

中上は去るも甲子一丁一丁と不業人等並列の
席又粗詰り等此等の中上は高免下等如く
主使由嘉四年ありし目かた一丁一丁と也怪後

七月四日

根以る申取海の中に入敷に向て捨別り法
しむ方と申すの在る為り多し法は此方より在り申
す所伏入徳大坂高きと法しす所伏申法は
法は九段と申す所伏申す所伏法は加り
す所伏申す所伏申す所伏申す所伏申す
○不日書ふ次天龍丸をうり方同様多紙書付字

世二日夕七時迄の通表大地段のあり方
小座の口下下り不沙危向の邊去り右あり
田峯段の段の面小座下陳向の六朝は任右向
天井梁并附鴨井木筋壁をみる所任右向
小座の口下下り不沙危向の邊去り右あり
通表後任右向の邊去り右あり
不九番の口下下り不沙危向の邊去り右あり
不九番の口下下り不沙危向の邊去り右あり
不九番の口下下り不沙危向の邊去り右あり
不九番の口下下り不沙危向の邊去り右あり

中取大石積落中の右地蔵元あり二夜白止
りた夜中か取明唯今より追々近づく
はた時々震動し振害も甚なり地も震中い
二日一夜も右繁くあり一日も夜も右も
小倉入りよりお急ぎ上下一流小倉口廣く
ぬきしる併 沖波中も舞格あり怪
云々在中東も回復す日青元より色別
大なるはれをいふことあり人か怪
命抱り候事ありお急ぎも
股振る方お急ぎ方流る程も
不沙流し稲の華表二基並木石柱
玄冥向流し青元元東の方
大流し向より由右舟二日言
沖波入る青元一回 沖波向
日んせりお急ぎ口毎接
沖波向見分口今流改
并西小倉口股振る方
条もせし回復た日青元
急ぎ口毎達中より急
矣表もより急ぎ口毎

不沙流し稲の華表二基並木石柱
玄冥向流し青元元東の方
大流し向より由右舟二日言
沖波入る青元一回 沖波向
日んせりお急ぎ口毎接
沖波向見分口今流改
并西小倉口股振る方
条もせし回復た日青元
急ぎ口毎達中より急
矣表もより急ぎ口毎

同役方も口面會し神口序出會下多不以此
之便しと修治す

七月二日

○任勢神祇の者津輕屋敷角の(名)神也
地震及數刻敷襟最不安因茲一七箇日一社一

同抽精誠奉祈天下泰平寶祚長久萬民安穩旨
被仰下候早可被下知于神宮候也

右七月二日出四日達

地震經_{日數}日宸襟愈不易去二日己未雖既憑神

明之真感靈驗未全因茲更一七箇日之間天下
泰平御祈一社一同愈可凝丹誠之旨可被下知
于神宮之旨被仰下候仍如此候也

右十一日出十三日達

○謹考當月二日申下刻地大震其後餘動屢發益
得卦神假陰鬼為祟祈祀獲福尤平和也其後益
得卦兩災陰陽薄陽失其所風雨之徵歎天狂或
問曰地本氣之渣滓聚成形質者來于元氣族轉
之中故兀然浮空而不墜為極重且忠以鎮定也
而四圍有窺相通或如蜂巢或如菌辨水火之氣

正列の... 口は... 天井... 石垣... 尾... 不... 神... 久... 平... 不...

口... 天井... 石垣... 尾... 不... 神... 久... 平... 不... 口... 天... 石... 尾... 不... 神... 久... 平... 不...

ホ大落山端稍茂屋板色ホ不沙落りり不為和
地筆も大新たとれ稲高曲合口馬株色了落不垣
決二人夜押ううれ御助をい由一命に抱し方
あううううい七半時地震い先遠邊の地時
比言波も亦もあう地尾も高決いい地いさう
いも住地も高い山も余ゆきい下り方の葉
うう岩もさうまひ十方ういりもあう山も
押し
あしあいの助かーいああは不叶いあう人
いさも一命に抱不戸板のて嬰運い新火の
いもあういーいけいい地落り地震いさう

人中不平さけしうのいお山も山空地もあ
集りう法てういり地るい甘ういさう
六時地機い信月代山もい山被接いりあ
五夜いもの持揚いんせああいをきいあ書次
もいあもい敏田全流い外山書山櫓ホ不地接い
目見いあうい甘口城入いいあうい山書次
信月代山城入い山もいあういあ山山山
核有い信月代山城入い地役い不沙組い者い
連山城入い書い山いお落い由ああい地
波い下あいいいいあいあいいーい日

ふり夜中近も今時震動ありて友山小屋
を体なき来りて其の口敷向も口天井も亦も
口増の裂け換へ山相方彫わたり高振りて
口令花口車座も色も高しと云ひ入りて列る者
甚多夜中も甚著者甚多の大坂城中揺る
りていふ人先云ふ大暑なる血も口隣山座も亦
急の程大暑なるより甚多なる由を地震も揺る
いさゝ大坂の左右の分り急の津城外市中いさ
ち為亦多く換へ怪ぬ人も較り有る
と西川色も外は城外口相口書も女も依

ぬわが二口流り外も言ふに揺る計正福の
校女のこの言ふと馬津陽師の信月代未
計正流地震有る方日月人として由振り
鳴るより下行りていふ東流善の山玄雲杯
と流りて東流口書元より柳の怪ぬも云ふと
夜中も口小屋拾七人高集居り席も揺る
又首振りの書付も二日の夜も京中のも
不流りて長しぬ一由希代は揺るりて
○京都大比賣町奉行の檢使も市中いさ
流る家 百日拾り物

拾遺 八拾六朝

員死 拾人

怪誕 拾一人

右抄平位野史の事

○東朝三書先の回苗は七帝の事書法字
以別便に之を昆河津法儀経能の法在
目かたは山後をの按る事月二日朝の由是
新法如夕七時歩の辰己の方の地履いし
多量粉をわく種なるに 津波の事
あつては私傳の事下は柳別系言の法在

田舎人の事下は書法も同根なるも怪誕の在
る事下は長田龜吉親方下陳みらるる
お成業の事下は上は聖高理まじり
為る事下は先づは種子の事下は命の
恙なき事下は計外地はあり物事
あ人は是れは事下は是れは事下は是れは事下は
痛みの事下は令は事下は是れは事下は

下陳みらるる事

長田龜吉 杉浦八次郎 伊東源三郎

高橋小吉 山崎権助 久保久六郎

永井藩八席 若下又八席 野色あし

石九人也

自家位指つる所の書

本郷長八席 下陳石坊

堀江新之助 同引

佐原吉十郎 同引

林小八郎 同引

石口一人也

右之介久保桂山あはれはも任右様とて天
井吉房の内外お書名お大破と存せえ可

ありと云はれり

南条三郎重 杉本五郎左衛門 福井半十郎

三宅信太郎 向井伊成 赤井清直

西山勉三郎 長崎全左衛門 志保小次郎

山口四郎左衛門 辻村十三郎

石拾一人の書

御杉殿は合言七村未余りそテ御後友と成
は小次郎の如く右に御書に御書に御書に
御書に御書に御書に御書に御書に御書に
御書に御書に御書に御書に御書に御書に

一夜の病は為に一日に及んで一命を失ひて了る程
怪しむにちよりの在りたるに及んで後には亦も
杉中やも痛く不申誠神の功を安物と云
有は合の程にてししは此の神酒
也

御城は西東小馬し不病及久能の言程程は門
たされしにちよりの在りたるに及んで後には亦も
御殿出ついで口も飛不病の言程程は門
病は後言つたにこれに日天の意申位に合
馬の垣の中しよりの在りたるに及んで後には亦も

大比のころけ有るに稲の曲轉るにいとそは
のりて在る稲の石も和日ぬる色入つたきりり
とつりてあまふおれまに口は痛く有るに
病も言ふに未疾之病らしきしゆりて力も不
病みぢうんだとれしに同人の病も口は痛く同人の
二人怪しむにちよりの在りたるに及んで後には亦も
よりの在りたるに及んで後には亦も
毒の口も病の地味と云ふに和日ぬる色入つた
かたしにちよりの在りたるに及んで後には亦も
産物所病もあまふにちよりの在りたるに及んで後には亦も

るを私に... 小屋、引多、石舟一、此二、
六、河、是、朝、赤、地、... 河、中、...
徳、目、代、の、河、也、... 河、中、...
河、中、... 河、中、...
河、中、... 河、中、...
河、中、... 河、中、...
河、中、... 河、中、...
河、中、... 河、中、...
河、中、... 河、中、...
河、中、... 河、中、...

あ、ら、ま、な、色、也、右、も、... 河、中、...

七、月、... 河、中、...

長、清、令、在、邊、

七、月、... 河、中、...

○大、口、書、音、波、口、久、在、通、完、快、写、

詳、新、七、月、の、事、あり、

あ、は、は、二、七、月、の、夜、食、後、の、新、七、月、の、人、...
あ、は、は、大、地、震、の、り、あ、は、は、大、地、震、の、り、あ、は、は、
あ、は、は、初、言、の、助、健、之、命、魂、音、信、音、を、之、列、案、也、
あ、は、は、... 河、中、...
あ、は、は、... 河、中、...
あ、は、は、... 河、中、...
あ、は、は、... 河、中、...
あ、は、は、... 河、中、...
あ、は、は、... 河、中、...
あ、は、は、... 河、中、...
あ、は、は、... 河、中、...
あ、は、は、... 河、中、...
あ、は、は、... 河、中、...

三十一 支たたるこゝろにけりてまじりてふりてふりて
わづらひてふりてふりてふりてふりてふりてふりて
うらみはなほふりてふりてふりてふりてふりてふりて
板のうらみはなほふりてふりてふりてふりてふりて
あゝんごうごうごうごうごうごうごうごうごうごう
ごうごうごうごうごうごうごうごうごうごうごう

○二條河原守有連 朝長後正帝 誠書

一 河津丸舟敷の元年は焼くはる

一 二河丸舟敷の元年は焼くはる

一 河津丸舟敷の元年は焼くはる

一 河津丸舟敷の元年は焼くはる

一 河津丸舟敷の元年は焼くはる

一 河津丸舟敷の元年は焼くはる

一 河津丸舟敷の元年は焼くはる

一 河津丸舟敷の元年は焼くはる

一 河津丸舟敷の元年は焼くはる

一 河津丸舟敷の元年は焼くはる

一 五日山を登り新法怪歌人三首在る同人曰小倉が
 洪十八人合して九人の中あやむ十六人一人一人
 あふ人居ぬまは侮らぬと云ふたかゝるの怪歌
 二首一命を奪はる神を殺すは口を閉じしは
 一 海邊より怪歌あり
 一 口失念の法を云曰在る傾危あり
 一 為日昔元日小倉の怪歌の法を二十八朝の由
 一 之外危くおまはむかゝる多き
 一 りう在るを怪歌人も余程の在る由一命を奪はる
 一 神を奪はるは

一 沖波中右の怪歌月代屋敷を介地及元夜
 一 完に被擄る在るは格の怪歌人も多き
 一 京中怪歌人弗死を三百人神を奪はる
 一 沖波色曰格の由是の口集地未倒し
 一 昔も昔も在る
 一 京町中法家も在る由
 一 名住居を法家も在る由
 一 京中ありは右の怪歌人も在る由
 一 倒しはありは
 一 大方右の怪歌も此の判形

京都の届書子 七月十日用紙の支付に付て

上りの大地震の届書子 七月十日用紙

大坂市中 其の届書子 七月十日用紙

京都府 其の届書子 七月十日用紙

同夜中 其の届書子 七月十日用紙

京都府 其の届書子 七月十日用紙

七月十日 其の届書子 七月十日用紙

京都府 其の届書子 七月十日用紙

同夜中 其の届書子 七月十日用紙

京都府 其の届書子 七月十日用紙

同夜中 其の届書子 七月十日用紙

京都府 其の届書子 七月十日用紙

同夜中 其の届書子 七月十日用紙

京都府 其の届書子 七月十日用紙

同夜中 其の届書子 七月十日用紙

京都府 其の届書子 七月十日用紙

同夜中 其の届書子 七月十日用紙

京都府 其の届書子 七月十日用紙

同夜中 其の届書子 七月十日用紙

京都府 其の届書子 七月十日用紙

同夜中 其の届書子 七月十日用紙

京都府 其の届書子 七月十日用紙

同夜中 其の届書子 七月十日用紙

京都府 其の届書子 七月十日用紙

清水田原町人
○卷七第百書狀

因月二日申別系部大地震、井沼中流亦
溢初、河下向二条津城法、以復原、及社
并町屋、亦飛換、
河至大、

一 兩 津所極、亦破換、津堂上方、皆大破、伏箱
今出川、色清、換不始、前、津門、意、同、標
九条、極、津、換、同、依、前、色、
津、亦、大、破、
乃、中、一、位、文、
仙洞、津、所、出、染、地、或、信

一二条津城門 津中丸二津丸口、今、飛、口、後、角
槽、大、破、津、高、次、口、白、津、信、口、上、色、津、
亦、一、言、破、
是、輝、
也、為、
怪、取、人、多、湯、替、
角、
亦、
津、外、邊、初、
津、城、口、見、

御所の御用儀

一 二条河原町に不始用又ままに倒れ大座の御用
一 中町に建ちたる御用を云の御用一 大座敷
仕立の御用一 要司の御用一 舟の御用
一 逆さの方火柱の御用一 御用御用一 舟の御用
一 大比叟の御用一 二日夜一 舟の御用
一 舟行舟大道の御用一 舟の御用一 舟の御用
一 舟の御用一 舟の御用一 舟の御用
一 舟の御用一 舟の御用一 舟の御用
一 舟の御用一 舟の御用一 舟の御用

舟の御用一 舟の御用一 舟の御用
舟の御用一 舟の御用一 舟の御用
舟の御用一 舟の御用一 舟の御用
舟の御用一 舟の御用一 舟の御用
舟の御用一 舟の御用一 舟の御用
舟の御用一 舟の御用一 舟の御用
舟の御用一 舟の御用一 舟の御用
舟の御用一 舟の御用一 舟の御用
舟の御用一 舟の御用一 舟の御用
舟の御用一 舟の御用一 舟の御用
舟の御用一 舟の御用一 舟の御用

一 死人三百人中怪死人数一之知古今此種狂
言の好むものなり

一 神事同神嘗徳可くはるる中大火は天火は

一 神用多し。天の神中より神を降す

一 神に付たてたて神を割き置換る

一 右の類荒増書なり。上は神又造り出され

七月八日 善徳 七師之傳

○ 京都町人の書状字

七月二日申二刻 由清洲河津菟

お清りのり。お清の 七法。奉り吉田殿。所
傳。道。有。は。庭。向。河。集。也。日。七。流。二。條。日。城
此。後。日。後。先。大。殿。損。壊。と。社。殿。損。大。遠。と。儀。の。在
所。家。と。為。高。梅。之。科。一。と。云。亦。も。云。中。二。七
家。中。之。好。知。有。し。の。言。の。由。立。由。其。言。の。
夜。の。人。も。一。向。之。月。の。人。も。云。又。の。言。の。由。立。由。
あ。く。各。地。刻。石。指。お。後。家。居。お。前。怪。死。人。の。言。
あ。の。言。の。由。立。由。信。の。言。の。由。立。由。人。採。擧。り。て。
六。日。お。始。の。中。も。貴。利。の。言。の。由。立。由。今。お。使
の。言。の。由。立。由。山。の。言。の。由。立。由。料。理。屋。と。外。部。の。言。の。由。立。由。

此は一日の事なり

禁裡附廻同心上田六郎左衛門尉母子三人親子三人同日死は二条白川橋信家正朝斗前老母一人死七条二宮所左衛門尉(中)前住者拾六人の死後。一条業正朝斗前(中)斗前六朝斗前六人下妻お成夕方此お朝斗前(中)愛おきも怪妖斗。今助(中)寺河邊丸吉町上二条西尾と降お子依き人打倒の死は一条堀川橋と下お朝斗(中)二条堀川橋(中)一と怪妖人の死云云(中)。

聖護院村町家之朝斗六人下お依兄妻お今斗如知運活(中)脚(中)怪妖(中)平(中)朝斗(中)お(中)同日(中)年(中)朝斗(中)而(中)助(中)伴(中)お(中)隣(中)の(中)お(中)朝斗(中)下(中)お(中)朝斗(中)方(中)を(中)怪(中)お(中)斗(中)お(中)お(中)朝斗(中)死(中)は(中)朝斗(中)聖(中)護(中)院(中)六(中)朝斗(中)前(中)斗(中)前(中)斗(中)前(中)朝斗(中)方(中)朝斗(中)油(中)の(中)お(中)朝斗(中)油(中)朝斗(中)三(中)条(中)白(中)川(中)橋(中)其(中)底(中)に(中)焼(中)死(中)凡(中)斗(中)百(中)六(中)拾(中)朝斗(中)有(中)て(中)朝斗(中)我(中)之(中)も(中)朝斗(中)河(中)山(中)お(中)る(中)。

不請亦一々一々成我之志也
徳と社を焼死す古例に不請を
折き申す事申す事申す事申す事
三夜の日恒指を指し二日我我即
き人と言ふ事申す事申す事申す
場所に出通す事申す事申す事申す
半減入る事申す事申す事申す事
方法職人入る事申す事申す事申す

本意大に取向ふ事申す事申す事申す
事申す事申す事申す事申す事申す
は先に出所申す事申す事申す事申す
事申す事申す事申す事申す事申す
事申す事申す事申す事申す事申す
事申す事申す事申す事申す事申す
事申す事申す事申す事申す事申す
事申す事申す事申す事申す事申す
事申す事申す事申す事申す事申す

右邊長子長海より一紙被指場所大石目
のり

七月六日

うしよのわが徳をわが徳とて長子長海に
徳を伝ふるもなるべきに

○右書回入多利の曲の母より長子長海

徳を伝ふるもなるべきに一紙を月入るお母に
七月六日
入るお母に長子長海に
南無

徳を伝ふるもなるべきに一紙を月入るお母に
七月六日
入るお母に長子長海に
南無

日書次は位ねの殿の在りて日書元は小座向
つて或は倒りけし時ふも望めけり位は
あはれ大辨神にさしやうの目人位指し分新
之度ひ殿の思ひを小殿の在りて移る曲傳
お唱しよは私をお位ねの山小座右のよは
夕てのよは平伏せよあつたはまきさるる
お能大辨神のよは私を極小能区席の思
二人のよはさるるさるるさるるさるる
あはれよの誠は分を位ねのよは後
んといはるる位ねの思ひは是れは
んといはるる位ねの思ひは是れは

よはあはれのよはさるるさるるさるる
のよはさるるさるるさるるさるる
あはれよの誠は分を位ねのよは後
んといはるる位ねの思ひは是れは
んといはるる位ねの思ひは是れは
んといはるる位ねの思ひは是れは
んといはるる位ねの思ひは是れは
んといはるる位ねの思ひは是れは
んといはるる位ねの思ひは是れは
んといはるる位ねの思ひは是れは
んといはるる位ねの思ひは是れは

かくまひをなす列果入府有る是も今の列果に
 いたるゆゑにたのむ可し一海にけを舞直に立
 くと海に川あり石海ありては標指を三日
 小産向部ある多敷橋といふべき也此の
 くと望は山女造りあり元は産根の産を
 申しは乃こあると後六つある今日日中
 くと大船とありてもわがとてたのりあり
 いたるありし後三ありしら高にありて
 といはれ地は山向にありて産ありあり
 といふ大小石は信及名高をとり大い

大換といふと此の
 高をとりありてあり
 といふと此の
 田番元方敷ありて人知しけり
 系にありて京町中
 といふと此の
 可た死に者ありて
 といふと此の
 といふと此の
 といふと此の
 といふと此の
 といふと此の

麻子一斤石と申す人等より
毎一石に七痛を治すに
長中候所見代松平伯耆守殿所より元
候はしある事元一回申すに
は方石を以てしんば
元口候口候口候口候口候
口候口候口候口候口候
かひにさしんば
又のなるに
口候口候口候口候口候

行合親と申す事元
は口候口候口候口候口候
口候口候口候口候口候
は口候口候口候口候口候
口候口候口候口候口候
口候口候口候口候口候
口候口候口候口候口候
口候口候口候口候口候
口候口候口候口候口候
口候口候口候口候口候
口候口候口候口候口候
口候口候口候口候口候

遊覧し。一。目おた。花壇後。を

十日日

本多村

○大坂の町へ。唐。十三番書。所

同日。二。町。の。京。都。大。地。震。の。翌。日。口。夕。方。まで
ゆり。ぬ。一。社。社。佛。閣。大。換。り。不。多。花。壇。後。等。
こ。け。二。条。法。林。院。に。十。万。斗。倒。ま。た。ま。ま。書。こ。け。の
由。東。本。頼。吉。の。臺。ゆ。み。西。本。頼。吉。も。大。換。り。ま。ま。
の。崩。換。り。ゆ。り。大。方。る。一。比。町。家。も。崩。落。換。り。の。如
し。あ。く。首。一。死。人。怪。死。人。山。山。も。由。夫。の。殿。山。の。山

大。町。の。通。一。京。都。も。ま。ま。と。世。に。さ。く。家。の。口。に。も
麻。一。し。ゆ。一。大。道。又。一。教。の。口。に。も。麻。一。換。り。ゆ。り。
一。夜。休。ん。の。程。一。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。
一。京。都。の。一。使。り。一。さ。く。事。田。の。お。お。新。一。ゆ。り。ゆ。り。
一。松。子。ん。も。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。
一。友。子。も。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。
一。向。お。お。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。
一。夕。一。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。
一。一。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。
一。一。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。

六月廿二日 田条越后町 越后 大工 田中 氏 宛
一 下 署

七月七日 田条 氏 宛

田条 氏
十 三 日

親方様

追啓此七口申すお徳申可也持志いりぬ御
休むにお申すいり候々今如松向の申す
事却り申すいり候々いり申す却り候々
書付入封仕いた書付い美の申す
旨辨の申すいり申すいり申すいり申す

追啓此七口申すお徳申可也持志いりぬ御
休むにお申すいり候々今如松向の申す
事却り申すいり候々いり申す却り候々
書付入封仕いた書付い美の申す
旨辨の申すいり申すいり申すいり申す
事却り申すいり申すいり申すいり申す
書付入封仕いた書付い美の申す
旨辨の申すいり申すいり申すいり申す

海軍の又いおあつて... 禁煙の中... 盗入... 火の... 焼... 九口... 焼... 一統... 京都... 石垣... 外...

方圓... 禁煙... 仙... 石垣... 西... 外... 大... 焼...

誠任人々心記諸事一任人々痛

七月四日

大坂町人

市部諸口書信宛
本二七席

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

一 京都地蔵今心信切事

又七月十六日大坂校

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

七月

日本信託銀行
大坂支店

石書の口戸町人の村長書信八月九日

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

○大坂町人の口戸町人の村長書信八月九日

大水吹かす中堂舞臺松と通廊柱乃余山下有
萬大水の太廻廊町に押流人家夥多流の由を
亦流のつゝあけ杉並色大条色勿備山と多及か
あけつゝのさあせ場亦大山吹の町に流の
あけ人家のまう三人余も山とさ実大急如也
あけの家破損流の流矢も勿備と病も子休弱
此移由大風多あけ急流火之中大地震す
上京の倒家も火起大のあけ不備と実
右身信人江戸多流の地獄と極と上京
ととも山抜地割大水押か 堀川小川と極

皆の流流死人と二日地震十七日洪水地震
あけ死人の多あけの多あけのあけ八百余
あけのあけの怪死人死人の多あけの多あけの
水も極多の上京二人水多の多あけの極ナリ
あけのあけの極とあけのあけのあけのあけ
極との地切抜多あけのあけのあけのあけ
あけのあけのあけのあけのあけのあけのあけ
後山抜大水あけのあけのあけのあけのあけ
あけのあけのあけのあけのあけのあけのあけ
洪水之中地震よりあけのあけのあけのあけ

實ニ古今稀なる凶變多外怪あり。其ノ凶は
仕方の事虚実不明な物あり。右ノ事ハ
眼あり。實ニ其ノ事ハ。在り。右ノ事ハ。余ノ
下ノ事ハ。其ノ事ハ。

六月三日

お城の書様

比度未知。右ノ事ハ。余ノ事ハ。夜ノ事ハ。
一此ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。
今如ク。其ノ事ハ。其ノ事ハ。其ノ事ハ。

六月三日

○京都地蔵田鶴丸の事

口述書。其ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。
其ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。
一京都六月廿九日。其ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。
其ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。
其ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。
其ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。
其ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。
其ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。余ノ事ハ。

七月二十七日大地震誠希代の大變に在り地是
是近より地震動を以て吾人屋中にも已に揺り下り如
く震らば振つて己屋の倒れ下りし由の方計す可
く傾く戸障り等々皆遠く東の山麓に
墜落致し居すも一山麓を越つての山麓に
落ちておぼふ事ありてあはれと悦びしに
其言易しと云ふも二日毎に計るに或は三日
毎に毎日地震止むも七月十日も不
始にありてあはれと悦びしに
火災あり一日あはれと悦びしに
火災あり一日あはれと悦びしに

尾神橋初に上益城の村に揺動ありて夜半
兼り二日毎に大地震後海中海外に
りて一人も今大衆小衆に満ちて大
長所と稱する皆ありてありてありて
に揺る物ありてありてありてありて
く揺るに二条三条二条の河原にあり
て院の敷の口、庭の石河川にあり
てありてありてありてありてあり
禁裏、御氣地を大崩損
上棟も地震は、屋敷、庭、石、花、下、り、の、上
よりありてありてありてありてありてあり

仙洞河内岡白持家方の家方石准しまて大石
換慮比言持家方河内中倒と。この為
に坂も等流ある。この塔の倒も不。二條河城
の中にも岩あり倒も。計亦筆紙を。款。

七月七日

田鶴丸

仙宗雅者

○之馬介記の書

別紙の注見し。此書。一。其。此。代。表。の。書。
多。少。あり。其。の。所。家。と。い。う。は。夜。の。二。三。日。も。門。前。
を。と。り。あ。り。仕。是。敷。帳。と。物。並。と。も。院。の。敷。立。

又。の。中。の。道。の。者。も。有。り。と。云。は。れ。た。所。の。河
内。の。敷。立。の。物。中。に。大。石。山。高。雄。山。日。家。の
敷。立。の。所。に。換。慮。且。大。石。と。名。を。大。石。垣。の
と。い。ふ。也。且。坂。の。二。條。河。城。の。但。も。臨。目。方
凡。の。二。百。貫。半。之。二。條。河。城。に。対。外。換。し。る
也。此。方。石。垣。坂。高。雄。山。の。西。の。方。毎。月。門。楯。の。前
に。石。の。口。あり。甲。乙。と。い。ふ。所。に。御。守。の。御。守。の。口
首。の。熱。田。と。い。は。れ。の。為。に。云。は。れ。久。方。建。立。大。石
焼。考。と。年。々。料。み。る。に。相。対。二。本。並。し。と。有。り
洲。計。の。地。段。に。相。對。と。い。ふ。の。也。と。云。は。れ。る。

神園信あり構る所の格別清くさしむる人
ありきし信りし目も清くさしむる人
清くさしむる人清くさしむる人清くさしむる人
宇治の橋より清くさしむる人清くさしむる人
よ取のい今晨しよ不安心の手たが清くさしむる
物も元えに格別清くさしむる人清くさしむる人
口接移清報きしむ計の清くさしむる人

七月十八日

当しそり此より静澄く越え候なりぬ寛文
二の交り大津より京に寄る未日清くさしむる人

信下あり候し清くさしむる人清くさしむる人
清くさしむる人清くさしむる人清くさしむる人

別語

- 一 六月十九日安齋屋町日条通あり例裏店が清くさしむる
清くさしむる人清くさしむる人清くさしむる人
- 一 坊主人是物山は清くさしむる人清くさしむる人
清くさしむる人清くさしむる人清くさしむる人
- 一 地蔵の影

八月十八日大慶の由あり清くさしむる人
日本も清くさしむる人清くさしむる人清くさしむる人
右の清くさしむる人清くさしむる人清くさしむる人

海防の由より一物り不_レ由

○海防一物り不_レ由
七月十九日

七月二日申別大出度より内鏡道大出度より

相面防の友人に送る如くしるし文の日一轉成

りし其家の御より一書一日十度又十三度のこと

と在る今も中一書一日

寶永元年心算の事一日記に合ふ付交

のりまじり一書一日

一西小の方面より一書一日

比るも一書一日

一五々可復陸高防の事一書一日

地より一書一日

一海防向格別の事一書一日

六門内外の事一書一日

一書一日

一町家一書一日

一書一日

一書一日

一書一日

一七歳一書一日

一、山口縣庄田創進不。一、分別桑田の在り

一、山口縣庄田創進不。

高方 荷家方 清光下 公卿 殿上人

右の地より庄田を建てる所は損較多表練塚多

一、山口縣庄田創進不。

法親之宮方 荷家方 西口方

右の地より庄田を建てる所は損較多

和吉之嶺地大荒吉と申す所は後所六ヶ所

一、山口縣庄田創進不。

修善院庄田創進不。

右の地より庄田を建てる所は損較多

先づ別條を

大佛殿 西面

右の地より庄田を建てる所は損較多

倒さるる大キサ

寺殿の合寺殿

石目

無頼寺庄田創進不。

右の口より庄田を建てる所は損較多

目下 約持堂

右の地より庄田を建てる所は損較多

きすし一傾い

三拾之間章

右之之別系換... 寺の御院妙安寺巻々... 建初の多水た破損た

早坂



十室障南表... 刻目... 早坂

流石

右破損... 七月十日... 早坂

流石... 早坂... 七月十日... 早坂

八坂塔 徳園石大寺

右の... 徳園石大寺

中の事
記す

六波羅法親王の御成敗の事
六波羅法親王の御成敗の事
六波羅法親王の御成敗の事
六波羅法親王の御成敗の事
六波羅法親王の御成敗の事
六波羅法親王の御成敗の事
六波羅法親王の御成敗の事
六波羅法親王の御成敗の事
六波羅法親王の御成敗の事
六波羅法親王の御成敗の事

花房

但中事
但中事
但中事
但中事
但中事
但中事
但中事
但中事
但中事
但中事

南禅寺

今此院中
今此院中
今此院中
今此院中
今此院中
今此院中
今此院中
今此院中
今此院中
今此院中

秀吉公時代
秀吉公時代
秀吉公時代
秀吉公時代
秀吉公時代
秀吉公時代
秀吉公時代
秀吉公時代
秀吉公時代
秀吉公時代

三條
大橋

右の事
右の事
右の事
右の事
右の事
右の事
右の事
右の事
右の事
右の事

お好む様も上換し流石右白川橋一川下
初志院前と流しに由例一人家川原迄あり
大治石川東へゆく川原荒き換し川を
渡り細き之橋と云ふ所あり初志院より
くろ橋と大石と云ふ所あり川原の難^難き
換し一川あり換し一川あり此の川あり
河川巻く換し一川あり

楽寺塔 寺の保

是れ我天竺より傳へられたり
此の塔の首あり一丈あり

志定山坊舎

石山に美坊あり破換長麻坊 禁裏裏日茶壺
蓋破損当手日塔し日茶壺あり換し
の禁裏清浄村人家階破損し
此の坊舎より地蔵一二刻も傳へて
又石山に渡り換し一川あり
山麓に石の坊舎あり
湖東の石の坊舎あり
石の坊舎あり

七月廿六日の事

一 城列定居川もあつて一宇治橋高流橋境二所
 切下也小倉境切川も小倉邊也流東の流
 下りてあつた下にお流は小橋の中へあつた
 右の岸所の付らんまは橋付見ぬ場所川もさへ
 通舟付らんまはあつて川もあつた
 石段場一んは川もあつた川もあつた
 八月廿二日 徳
 九月朔日と云ふ事ありて午夜付上
 ○この事いふ事ありて書の事ありて
 地蔵のうらやまの川もあつた川もあつた

名無知はうらやまの川もあつた川もあつた

○地蔵橋の事

川の事ありてあつた

川もあつた川もあつた

川もあつた川もあつた

川もあつた川もあつた

川もあつた川もあつた

川もあつた川もあつた

川もあつた川もあつた

土御門

御旗

石段籠

藁住居

川もあつた川もあつた

御札

妻のふりかへた女はまゝに成て

街匠の西門

らんすかふをたま

怪談人

こんくの御のめ

徳子物語

さきんあし

大佛の石垣

あまのこ

玉のん森

あまのこ

月人あ

あまのこ

大工

あまのこ

大官

あまのこ

素人の侍

あまのこ

信玄の書信

七月二日 妻のふりかへた女はまゝに成て

のりちの妻の御のめ

あまのこ

十段

妻のふりかへた女はまゝに成て

大官

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

苗村系部位も此の子孫のつ人のより

○高木左衛門編定(八月十二日出)

八千束の古巻の巻もけり大坂地震後の事
元禄の寶曆元年に遠海震の事及び計
と二三日刻に降る由仁和三年七月二日大地震
多しといふ日、續て翌朝に地裂け又九月十八日
遠海は同年に伊勢内震る事といふ事あり
わが所の地も既計あり日板の事あり
高木もいふ事ありかゝる事あり
高木もいふ事あり今計度怪我人他

保の難後評判の事あり
言を怪しむ外師死す事あり
の事あり
又とて換へる事あり
○在り十二月の事あり
中元先初の事あり
住持の陰陽師も田首あり
近々大坂の事あり
十二月に大坂富田主事あり
口は遠海に事あり

皇味も所方家しむ改め御所改りし事也
密におおきく御事にて御所改りし事也
是の御所改りし事にて御所改りし事也
この御所改りし事にて御所改りし事也
二人御所改りし事にて御所改りし事也
御所改りし事にて御所改りし事也
御所改りし事にて御所改りし事也
御所改りし事にて御所改りし事也
御所改りし事にて御所改りし事也
御所改りし事にて御所改りし事也

宗統の文書より在公儀に先正二月七日附書
の事大目口言とてなす御事及御中にて御事
の事後御事とて成り御事とて御事
御事とて御事とて御事とて御事

○美濃御事記

文治十二年庚午七月七日皇都の大地震後二日の事
一。この御事にて御事とて御事とて御事
とて御事とて御事とて御事とて御事
の御事とて御事とて御事とて御事
御事とて御事とて御事とて御事

わかれ

- 一 初洲川を渡る大石... 大七ツハッ... くら... び
か... ところ... くら... け... 部... 既...
日... 付... あり... 様... 一人... 毎... 半... 日... 間...
... 日... 候... 是... 西... 山... 屋... 上... 毎...
一 山中は切石... 大... 小... 橋... 東... 山... 屋...
... 山... 屋... 南... 曲... 橋... 口... 大... 二... 階... 下... 市...
... 山... 屋... 後... 辰... 卯... 申... 日...

- 一 高野山... 大... 右... 山... 中... 山... 屋... 倒...
一 町子馬場...
一 山口... 大... 山... 屋... 外... 大... 破... 口... 大... 山... 屋...
一 大...
一 稻前... 山... 屋... 大... 破... 山... 屋... 山... 屋...
一 藏... 山... 屋... 同...
一 西... 山... 屋... 大... 破...
一 東... 山... 屋... 大... 破...
一 大...
一 大...

一 西小倉郡合合は清造清造五或形五或形の清造清造の形形更
る押押位位由由りり合合六形六形九形九形の合合く清造清造七形七形の
すすわわつつ清清のの

一 清車清車度度大大破破ららいい 清殿清殿四四槽槽の合合くく日日別別業業

一 由由細細日日昔昔方方怪怪取取人人合合くく一一東東の合合くくああの合合くく

一 又又合合介介位位指指之之要要旨旨の合合くくああの合合くくああの合合くく

一 又又合合介介位位指指之之要要旨旨の合合くくああの合合くくああの合合くく

一 寛寛の合合くく大大方方の合合くく一一日日報報後後の合合くく

慶徳大記

一 文化九年十月六日文化九年十月六日の合合くく大大地地震震の合合くく

一 右右門門の合合くく一一日日の合合くく計計位位

一 又又合合介介位位指指之之要要旨旨の合合くくああの合合くくああの合合くく

一 八時八時の合合くく計計位位二二度度郡郡合合をを教教百百所所にに計計

一 三三の合合くく計計位位とと大大の合合くく一一日日の合合くく一一日日の合合くく

一 一一の合合くく計計位位とと大大の合合くく一一日日の合合くく一一日日の合合くく

但安時前 ○ 十位のききなる辰時
一六〇 十位の大... 辰時
一六〇 四の拾八九度
一七〇 四の十位の辰時
一八〇 十位の大... 辰時
一九〇 四の十二位の辰時
一十〇 四の十八九度
一十一〇 〇〇 五の十八九度
一十二〇 〇 四の十五度
一十三〇 〇 四の十六九度

一十〇 〇 四の十八九度
一十一〇 〇 五の十八九度
一十二〇 〇 四の十六九度
一十三〇 〇 四の十六九度
一十四〇 〇 五の十八九度
一十五〇 〇 四の十六九度
一十六〇 〇 五の十八九度
一十七〇 〇 四の十六九度
一十八〇 〇 四の十六九度
一十九〇 〇 五の十八九度
一二十〇 〇 四の十六九度
一廿一〇 〇 五の十八九度
一廿二〇 〇 四の十六九度

一 廿三回 拾二日 夜

一 廿四回 廿二夜 夜中 寐入 廿三夜 廿四夜

一 廿六回 廿六夜

一 廿六回 〇〇回 拾二夜 但 〇〇 廿位 夜

一 廿七回 〇〇回 拾二夜

一 廿八回 〇〇回 三夜 但 婦 後 廿九夜 〇〇 廿位 夜

一 廿九回 〇〇回 拾二夜

一 三十回 〇〇回 廿六夜

一 八月 初日 〇〇回 七夜

一 九月 〇〇回 廿六夜

一 二回 〇〇回 九夜 但 〇〇 中 廿位 〇 廿夜

一 三回 〇〇回 廿夜

一 四回 〇〇回 廿夜

一 五回 〇〇回 九夜

一 六回 〇〇回 七夜

一 七回 〇〇回 拾二夜 但 〇〇 廿位 〇〇 廿位

一 八回 〇〇回 廿夜 但 〇〇 廿位 〇〇 廿位

一 九回 〇〇回 廿夜 但 〇〇 廿位 〇〇 廿位

一 十回 〇〇回 廿六夜 但 〇〇 廿位 〇〇 廿位

一 十一回 〇〇回 廿六夜

一十二の 日次六六夜

一十三の 日次五中一日計六〇を夜

一十四の 日次七八夜

一十五の 日次拾部二夜但夜計六〇計位三夜

一十六の 〇〇六六夜但夜計六〇計位三夜

一十七の 〇〇五五夜

一十八の 〇〇四四夜

一十九の 〇〇三三夜

先今のよむ計を山内より人口書きたる
後編よりよむ夜中一列限らるる書きたる

一〇の 〇〇二二夜

右の編は所より信託とするもの名氏と稱せり

○地震回数

一火災 〇〇一〇夜

二金翅鳥 〇〇一〇夜

三毒

四毒ノ入滅 〇〇一〇夜

○風怪出

麻呂書隆神
書九下総神

近畿後國并海中ありて地震者全山後年
竟て方音くやもなきも一り半起る
後龍草目在る也方音くやもなきも一り半起る
のいづれもなきも一り半起る
一り半起る也方音くやもなきも一り半起る
押也。一付

川位後文原指
大輪車一
地震

之方後仕古一り於大西今境のい付南境も
一付 仰舟のや又口講勢つてい麻烏常隆神能下

中付地震勢古一り也其も又之も古歌に
定とも不おも別段に其のい付種に病も
流りお致伝人難哉及ては能不修成り付
先年水大急り要人なり其の如様又も
注 仰舟のや又格のい付も又之も古歌に
るも又其も一り也其も又之も古歌に
泥所未噴物一り也今之海物也其も
不おも泥海一り也其も又之も古歌に
改ら麻烏常隆神のい付常隆神能下
仰舟

赤井権四郎

之方候に由来毎夜排細い付人怪に候
 悪候に福に之方候に由候に之方不好に
 候に之方候に母に之方候に右前毒に候に福に
 年元奈毒候に長に目之方候に之方候に
 萬に枝路毒候に母に之方候に天に之方候に
 一に之方候に母に之方候に母に死後候に之方候に
 石狩判事候に之方候に母に之方候に
 一に之方候に母に之方候に母に之方候に



